

「自分たちに何が出来なのか？」を考え、表現し、行動する力を育む

福島県 会津若松市立松長小学校

2011年度からESD（持続可能な開発のための教育）活動に力を入れる会津若松市立松長小学校。子ども一人ひとりが「自分たちに出来ること」を考え、アイデアを出し合って社会貢献につながるプロジェクトをつくり上げていく。こうした活動を通し、子どもは自信を持って自分の考えを表現できるようになってきたという。

取り組みのねらい

- 規範意識を持ち、それを実行できるようにする
- 相手の話をしっかり聞く姿勢を育てる
- 人間関係を広げ、異なる価値観を持つ人々と共生できるようにする

取り組みの内容

- 表現力やコミュニケーション能力の土台となる人間関係を育てる
- 広い世界と自分たちが住む地域に共通する課題を見付けさせ、「自分たちに何が出来なのか？」を考えさせる
- 諸外国の小学生とSNSを介して交流する

取り組みの成果

- 子どもたちが自分の考えを生き生きと表現するようになった
- 人の意見を大切にするようになった
- 学校以外の人たちとのかかわりを通して、コミュニケーション能力が育まれた

S c h o o l D a t a

◎1990(平成2)年開校。教育目標は、「『あいっこ』としての誇りを持ち、夢に向かって、ともに学ぶ児童の育成」。ESDやSNSを取り入れるなど、新たな教育活動にチャレンジしている。



校長 石綿吉男先生

児童数 366人 学級数 14学級

所在地 〒965-0001 福島県会津若松市一箕町4-9-2

TEL 0242-32-2490

URL <http://www.matsunaga-e.fks.ed.jp/>

公開研究会 2013年11月15日(金) 予定

● 取り組みのねらい

自分の思いを表現し
相手の話を聞く姿勢を育てたい

会津若松市立松長小学校は、1990年に開校した比較的新しい学校だ。校区には、新しく開発された地域もあり、昔からの住民と新しく移り住んできた住民とが混在し、また、会津大の教員宿舎があるため、外国籍の子もが在籍するなどの特徴がある。

子どもは、地域に坂道が多いこともあり、体力があり元気いっぱいだ。また、市が会津藩の子弟教育の方針を基に策定した「あいっこ宣言」が浸透しており、規律規範の意

自ら表現したくなる授業づくり

識が根付いてると、石綿吉男校長は話す。

「この宣言には『人をいたわります』『卑怯なふるまいをしません』などの6条と、『ならぬことはならぬ』といった、子どもの心を育てる言葉が並びます。子どもはそれを大切に、あいさつやお礼の言葉をきちんと言いますし、困っている友だちに手を貸す姿もよく見られます。しかし、暗唱が出来ても言動を全て伴わせるのは難しいものです。もっと意味を深く理解させたいと考えています」

また、子どもたちにやや飽きっぽい気質が見られ、相手の話をじっくり聞けないことも、石綿校長は課題として挙げる。

「本校にも外国籍の子どもがいるように、今後、外国人と共に何かをする機会は多くなると思います。異なる価値観の人々と共生するには、人間関係をきちんと築く力が必須でしょう。しかし、そのためには相手の話に耳を傾けることが大切です。コミュニケーション能力を育てていくために、小学校段階ではまず自分を表現すること、そして相手の話を聞く態度を身に付けたいと考えました」

同校では、コミュニケーション能力を育む前提として良好な人間関係が必要と考え、どの子どもも「自分は話してもいいんだ」と思えるような学級の雰囲気づくりを心掛ける。4学年主任の細谷彰宏先生はこう説明する。「自分の考えや思いを口に出すのが怖いという子どもがいます。そのような子どもには

教師が発言の手助けをして、学級や集団の中で意見を聞いてもらえて共有されたという喜びを感じさせることで、『話したい』という気持ちを育むようにしています」

● 取り組みの内容

正解のない課題だからこそ 思考力や表現力が鍛えられる

子どもが自分を表現し、他者とのコミュニケーション能力を育む活動の一環として、同校が2011年度から取り組んでいるのが、ESD (Education for Sustainable Development) 持続可能な開発のための教育だ。同校は、ESDに基づく活動を「総合的な学習の時間」で行っている。これは、持続可能な社会を築く担い手を育てる教育のことであり、環境、福祉、伝統文化、産業など、地域のさまざまな課題解決に向けた活動を通して、子どもが、自然や社会と触れ合い、多くの人と交流しながら、知識や知恵を学び、考える力や行動力などを身に付けていく。08年に政府が策定した教育振興基本計画ではESDの推進を重要施策とし、新課程には持続可能な社会の構築の視点が盛り込まれている。

12年度の6年生の活動を見てみよう (P.20 図)。出発点は「私たちが住む地球にどんな問題が起きているか」だ。子どもは図書館やインターネットで調べ、人種差別、戦争、環境破壊などの分かった結果を発表した。子ど



会津若松市立松長小学校校長
石綿吉男 いしわた・よしお
「子どもが『学校に來たい』、保護者が『預けたい』と思える、夢や可能性に向かって頑張れる学校をつくる」



会津若松市立松長小学校
鈴木淳 すずき・じゅん
教務主任。4学年担任。「毎日子どもが笑顔で楽しく通え、その笑顔で保護者も笑顔になれる学校や学級をつくる」



会津若松市立松長小学校
那知上恵 なちがみ・けいいち
研究主任。日本語指導学級担任。「世界に目を向けて、グローバルに活躍できる人を育てたい」



会津若松市立松長小学校
加藤久子 かとう・ひさこ
5学年主任。国語科主任。「自分に厳しく他人に優しく」をモットーに、素直で伸び伸びとした子どもを育てる」



会津若松市立松長小学校
細谷彰宏 ほそや・あきひろ
4学年主任。「子どもたちが助け合い、人のために働くことの尊さを感じられる学級をつくる」



会津若松市立松長小学校
小川百合子 おがわ・ゆりこ
3学年担任。「毎日『学校が楽しい』と子どもが言う学級をつくる。また、『ならぬことはならぬ』を徹底する」

もの関心が高まったところで、教師が「私たちの住む地域にはどんな問題が起きているのか」と投げ掛けた。子どもが家族に聞き取り調査をする一方、会津大に協力を依頼し、

チュニジア、台湾、スリランカ、ベトナムの留学生を招き、異文化交流のワークショップを開いた。取り組みを担当した那知上恵一先生はこう説明する。

「留学生には、自国の文化や衣食住などの他に、自国が抱える問題についても話してほしいと願いました。子どもに、他国を知ることによって、自分の住む地域の課題に気付いてほしかったからです」

その後の話し合いで、どの国にも共通してゴミ問題があることが挙がり、地域のゴミ問題を調べるためにゴミ拾いをした。その結果から「自分たちに出来ること」を討議。ペットボトルのリサイクルというアイデアが出た。こうして、ペットボトルでフラワーポットを作って花を育て（写真1）、校区にある東日本大震災の被災者が住む仮設住宅を訪問してプレゼントする活動へと発展した。

このように、子どもたちは、活動から気付いたことや考えたことを話し合い、自ら新たな課題を見付け、次の活動へと発展させていった。課題には正解はなく、子どもたちは話し合いを通じて、自分たちでゴールのイメージをつくり上げていく。

「自分たちで設定した課題だからこそ、どうすればよいかを考え、調べ、友だちと話し合うという主体的な活動に結びついているのです。『教える教育』ではなく『主体性を育む教育』となっています」（那知上先生）

仮設住宅への訪問が決ま

り、「どんなフラワーポットにしたらよいか」「どうすれば喜んでもらえるか」など、子どもたちの話し合いはいつそう活発になった。こうした活動を通し、子どもたちは「皆で協力することで考えを高められる」と実感し、自分の考えを伝えたり、友だちの考えを受け入れたりすることの大切さに気付いていく。

「自分の考えを実現させたいという気持ちが強まると共に、友だちの考えもどうかを考えるようになります。ですから、反対意見を言う際に、理由を伝えて説得する姿が見られるようになってきました」（那知上先生）

● 取り組みの成果

普段は発言が少ない子どもも表現する機会が多くなった

子ども主体で進む活動のため、当初、教師

図 活動の流れ、および表現とのかかわり

活動内容	表現活動
話し合いをしながら、これからの活動の見通しを持たせる。	子どもから活動してみたいことを発表させる。その理由を説明させる。
自分たちの地域でどのような問題があるかを話し合う。	自分が気付いたことや家庭での聞き取りを基に発表させる。
世界中にもいろいろな問題があることに気付く。	パソコンや本を使って、問題点を発見し発表する。
世界にも自分の住む地域にも共通する「ゴミ問題」に気付く。	グループで「ゴミ調べ」をして発表する
ペットボトルを集め、フラワーポットを作る。	どのようなフラワーポットにすればよいかを話し合う。
留学生と一緒にメッセージづくりをし、プレゼントの準備をする。	どのようなプレゼントにして渡すといいか話し合う。
仮設住宅に花とメッセージを届けに行く。	どのようにすれば仮設住宅の皆さんに喜んでもらえるかを話し合う。
会津大の留学生も招いて、次のプロジェクトについての話し合いをする。プロジェクトの計画をする。	これから私たちは地域のためにどのようなことができるかを話し合う。

*同校の資料を基に編集部で作成



写真1 東日本大震災の避難住民に、花を育ててプレゼントする活動の様子。ペットボトルの植木鉢作りでは、住民に喜んでもらおうと、子どもは思い思いに飾り付けをした



写真2 海外の子どもたちの交流サイトに掲載するための動画を撮影

自ら表現したくなる授業づくり

は授業展開をイメージしにくく戸惑うこともあった。今では、教師がある程度の道筋を想定し、子どものアイデアをなるべく生かして進めるようにしている。那知上先生は「活動が異なる方向に進みそうな時も、まずは子どもたちに話し合いをさせています」と言う。

子どもが生き生きと自分を表現する姿を目の当たりにし、教師は子どもの主体性を信じる大切さを実感している。12年度の6学年担任の小川百合子先生はこう話す。

「普段はあまり発言しない子どもも、発言し活動に進んで取り組んでいました。多くの子どもが自由に考えを言うようになって、子どもの考えや思いは一人ひとり違うのだと改めて気付かされました。そうした違いが、活動をいっそう深めていると思います」

また、教務主任の鈴木淳先生は「子どもが自分たちで活動を進めることから得られる発見や感動、そして、未知の世界を体験した時の驚きや気付きはとても大きいものです。外部の人とかかわり、コミュニケーション能力が育まれる良さもあります」と強調する。

ESDと教科学習とのつながりも意識する。特に、表現力の基本として国語は重視している。国語科主任の加藤久子先生は話す。

「話す、書くの基本を身に付けているからこそ、子どもは自信を持って表現できます。国語の授業では、自分で課題を見付け、誰に何を伝えるかという目的をはっきりさせてか

ら、話したり書いたりするようにし、表現力を鍛えています」

同校では、アメリカのフロリダ州にある小学校と「Going Global」(SNSによる国際交流プロジェクトへ*)に参加し、メッセージや写真のやり取りを行っている。ここでは、日本語で書き込むと自動的に英語に翻訳され、英語での書き込みは日本語で見られる。子どもたちは言語の壁を感じずに、日本とフロリダの気候の違い、給食や行事など、お互いの学校の様子について意欲的に交流している。また、「四季プロジェクト」では、パキスタンやアメリカにある学校と、地域の四季の様子を互いに紹介し合い、その違いに驚いていたと言う(写真2)。

「外国の文化や事情に関心を持つと共に、異なる文化の人々と交流する方法が身に付くと期待しています」(那知上先生)

今後は、ESDやSNSの取り組みを更に推し進めていく考えだ。

「最初から大きなプロジェクトを展開しようと思ってもなかなかうまくいきません。急がずスモールステップを積み重ねることで、徐々に活動を広げていく考えです」(那知上先生)

「自校で出来ることには限りがあり、外部との連携によって教育活動はより充実します。会津大をはじめ、関係機関との連携の強化を図っていききたいと思います」(石綿校長)

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

当然のことながら、学校経営は校長1人では出来ません。先生方の意見を吸い上げ、協力して活動を進められるようにし、先生方が更に指導力を高められるように研修に積極的に参加するように伝えていきます。

教育は長い時間が掛かるもので、特効薬はありません。「和をもって尊しとなす」を胸に、皆が協調し合える環境をつくり、子どもが「ここで学んで良かった」と思える学校を目指しています。

校長 石綿吉男先生

ミドルリーダーの役割

校長や教頭と先生方との橋渡し役になり、仕事をしやすい環境や組織をつくるのが、教務主任としての大切な役割だと考えています。若手やベテランにかかわらず、気兼ねなく意見を交わし合える雰囲気をつくることも大切にしています。

場合によっては、どこまで自分の意見を出してよいのかと迷うこともあります。「こうした方がよい」と思うことは積極的に話すよう心掛けています。

教務主任 鈴木淳先生